耳川と人物

デ・レーケ　日本の治水の恩人

1842(天保 3）年　オランダに生まれる
1873(明 6）年　内務省土木局に招かれ、G.A. エッセルらと来日
1876(明 9）年　三国港の築港
1887(明 20）年　大阪港の築港、淀川の改修、木曽川の分流
1890(明 24）年　筑後川導水堤
1891(明 24）年　常願寺川治水工事
1891(明 24）年　**細島港築港**、内務省勅任官技術顧問
1903(明 36）年　離日
1913(大 4）年　アムステルダムにて死去

（デ・レーケが関係した土木構造物）**細島港の築港（宮崎県日向市）**
・四日市港の潮吹き防波堤（四日市市、重要文化財）・オランダ堰堤（大津市）
・松尾池（岐阜市 ）・巨石積み堰堤（中津川市）・羽根谷巨石堰堤（海津市）・
デレーケの石積み堰堤(中津川市）・デレーケ堰堤(木津川市)・デレーケ堰堤(美馬市）・神田下水（千代田区）

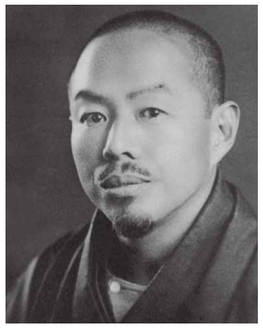
明治政府は日本の近代化にあたって教育、医学、法律、土木などの各分野の専門家約 2,300 人を欧米から招聘し雇用した。土木技術者では約 120 人に及び、その大多数はイギリス（鉄道、港湾、道路等）であったが、河川の改修など治水と築港については、オランダから招聘された。
都合 30 年以上日本に滞在し、1903 年、離日。在日中に提出した報告書は 57 編に上り、2 度叙勲され、帰国に当たって日本の土木の基礎を築いたとして勲二等瑞宝章を授与された。退職金は、現在の価格にして 4 億円に相当したとされ、当時の上官で内務省土木局長だった古市公威ら高級官僚らの労いもあったとされる。

筑後川導水堤

柳田國男　日本民俗学の祖

1987(明 8) 年　兵庫県福崎町に生まれる
1900(明 33) 年　東京帝国大学法科大学政治科卒業
9902(明 35) 年　法制局参事官になる
1908(明 41) 年　**九州旅行（椎葉訪問）**
1909(明 42) 年　『後狩詞記』、遠野訪問
1920(大 9) 年　朝日新聞社入社
1949(昭 24) 年　日本民俗学会会長となる
1963(昭 37) 年　東京世田谷成城にて死去
（主な著作）『海上の道』(1961)　『海南小記』(1925)
『後狩詞記』(1909)　『遠野物語』(1910)

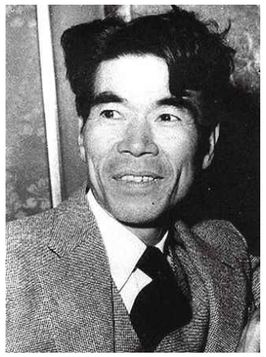
「日本民俗学」の創始者で、近代日本を代表する思想家。大学卒業後、「農政官僚」となり、視察や講演旅行で日本各地の実情に触れ、普通の人々への関心を深め、文書に書かれた従来の歴史学を批判、名もなき庶民（常民）の歴史や文化を明らかにしたいと考え、「常民文化の探求」と「郷土研究」の必要性を説く。日本人の生活慣習や歴史伝承、民俗信仰を記した『狩後詞記』『遠野物語』『郷土生活の研究法』『日本の祭』、戦後日本人のアイデンティティ再構築のために書いた『先祖の話』、日本人の源流を求めた最後の著作『海上の道』等多数の著作は、日本文化史研究上の礎となっている。



若山牧水　旅と自然を愛した歌人

1885(明 18) 年　宮崎県東臼杵郡東郷村に生まれる
1904(明 37) 年　早稲田大学文学科入学。同級生の北原白秋、中林蘇水と親交、「早稲田の三水」と呼ばれる。
1908(明 41) 年　処女歌集『海の声』出版
1912(明 45) 年　喜志子と結婚
1920(大 9) 年　沼津の自然を愛し、一家をあげて沼津に移住
1926(大 15) 年　詩歌総合雑誌「詩歌時代」を創刊
千本松原伐採に対し、計画を断念させる
1928(昭 3) 年　死去。享年 43
（歌集）海の声(1908) 別離(1910)　路上(1911) みなかみ(1913)　秋風の歌(1914)
砂丘(1915)　朝の歌(1916)　白梅集(1917) さびしき樹木(1918)　渓谷集(1918)
山桜の歌(1923) 黒松(1938) など

歌人 若山牧水は 43 年の生涯の中で 9,000 首の歌を残した。明治中期以降、与謝野晶子など浪漫主義の歌人達が絶大な人気を博す一方で、牧水は社会や流行などに流されることなく、その時々に湧き起こる思いや頭に浮かぶ情景を独自の世界感で表現。自然主義文学と呼ばれる牧水の歌は人々の胸を打ち、文芸に親しむ人達だけでなく広く庶民の心に浸透していった。
牧水の歌碑は約 300 基確認されており、その数は歌人の中で最も多く、旅を愛した牧水の足跡、人気をうかがうことができる。牧水の生誕地日向市東郷町をはじめ全国ゆかりの地では、毎年歌人にちなんださまざまなイベントが行われており、国民的歌人 若山牧水は時代や世代を越えて今もなお多くのファンを魅了し続けている。。



吉川英治　新平家物語

1892(明 25) 年　神奈川県久良岐郡中村根岸に生誕
1903(明 36) 年　家運傾き小学校を中退
1909(明 42) 年　年齢を偽って横浜ドック船具工となる
1921(大 10) 年　講談社の懸賞小説入選。東京毎夕新聞社入社
1935(昭 10) 年『宮本武蔵』の連載を開始
1938(昭 13) 年　ペンの部隊として従軍。
1950(昭 25) 年『新・平家物語』を週刊朝日に連載
取材のため椎葉を訪れる
1960(昭 35) 年　文化勲章受章
1962(昭 37) 年　毎日芸術賞受賞。死去。
（主な著作）『新編忠臣蔵』(1936)『親鸞』(1938)『宮本武蔵』
(1939)『三国志』(1940)『源頼朝』(1941)『新書太閤記』(1941)

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり
娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす
おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし
たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ

この有名な序文から始まる『古典・平家物語』は平安時代末期に起きた源平の争いを舞台に、世の中の儚さや皮肉、人間の愛憎や愚かさが描かれた軍記物語である。吉川英治はその『古典平家』のみならず『源平盛衰記』『玉葉』『吾妻鏡』など同時代の古典と独自の考察を取り入れて『新・平家物語』を完成させた。週刊朝日での連載は戦後間もない昭和 25 年から実に 7 年にも及び、名実ともに吉川英治の代表作となった。

増田　淳　戦前の橋梁設計家

1883 年（明 16）：香川県高松市生
1907 年（明 40）：東京帝国大学工科大学卒業
1908 年（明 41）：渡米
1922 年（大 11）：帰国、「増田橋梁研究所」を開設
1947 年（昭 22）：死去
アメリカで 30 橋、日本で 76 橋を設計している。
（主な作品）：信夫橋（福島県）、荒川橋（埼玉県）、白鬚橋（東京都）、
伊勢大橋（三重県）、鳥羽大橋（京都府）、十三大橋（大阪府）、
武庫大橋（兵庫県）、吉野川橋（徳島県）、長浜大橋（愛媛県）、
美々津橋（宮崎県）

大正末期から昭和中期にかけて活躍した橋梁設計家。生涯に 80 を超える橋梁を設計した。架橋は全国各地におよび、様々な形式の橋梁がある。計算尺やそろばんの時代、この数量は驚異的な数である。技術的な評価はもちろんのこと、デザインや美的センスにすぐれた美しい橋梁を設計した。
没後、その業績は一部の専門家を除いてほとんど知られることがなかったが、2002 年、これらの設計図書類が多数、土木研究所に保管されているのが発見される。

白鬚橋（東京）

椎葉村十根川集落

参考資料
□椎葉村教育委員会告示 3 号（平成 10.6）、□椎葉村史資料編（椎葉村編）□農水省 HP、□宮崎県郷土先覚者 HP、広報課 HP、□日本民俗学の源流(牛島盛光著)、□柳田國男を歩く(江口司著)、□高知県橋梁会研修会（技術伝承シリーズ）HP、□日本植物研究の歴史小石川植物園の 300 年の歩み（大場秀章編）、他

■このパンフレットは日本商工会議所の補助事業「地域資源∞全国展開プロジェクト」で、日向商工会議所が推進する「木造建造物産業観光等プロジェクト」の一環でつくられたものである。 © 日向商工会議所　制作：川村宣元建築設計事務所 2012.2（1）

■柳田國男と椎葉

椎葉村竹の枝尾、中瀬宅の一角に「民俗学発祥の地」なる一基の石碑がある。柳田国男の処女出版『後狩詞記』の記念であるり、同時に同書の共著者ともいうべき中瀬淳（当時村長）顕彰の意も込められている。

柳田は同書刊行の前年（明治 41 年）、7 月 13 日から 18 日まで、椎葉山中に在って、村内の主要集落を巡回探訪した。そのとき中瀬村長は五夜、柳田と同宿しながら案内役をつとめ、自らも狩猟民俗誌を執筆したり、狩猟文書を筆写して同書の出版に協力した。

椎葉を含む九州・中国・四国の旅行は、「五月の下旬から約三ヶ月に及ぶ長旅で、内地における私の一番長い旅であった」とし、「今日ではこれが日本民俗学の出発点のように言われている」(『故郷七十年』1957 年) と、自ら語るように、日本民俗学史上、重要な意味を持つことになった。しかし、「遠野物語」に比べると同書が話題になることは少なかった。

柳田が前記三ヶ月の旅行中に、都城の持永旅館に宿泊し、たまたまここに止宿していた高岡宮崎県知事に椎葉の話（焼畑農法）を聞いたことが、椎葉探訪を決断させることになった。それ以前にも、熊本で聞いた「日向那須の話」、人吉では、「那須一族のものが平家追討の後、子孫を残して去った話」、五木の役場で「文化 12 年銘の畠と畑を区別した五木村絵図」に接したとき、柳田を椎葉に向けさせる動機があった。

1908(明治 41) 年 7 月 12 日、富高（現日向市）を発ち、椎葉山中を目指す。江戸時代からの役人の常宿、神門（みかど）（美郷町南郷区）の庄屋跡若杉宅に止宿。

7 月 13 日、神門を発ち、笹の峠を越え、椎葉第一泊の宿は 、旧松尾村庄屋跡松岡久次郎の屋敷であった。

7 月 14 日、一行は役場で小憩し、桑弓野の郵便局長黒木盛衛宅に着く。

7 月 15 日、黒木宅に同宿した中瀬村長は大河内の椎葉徳蔵家に案内し止宿する。この夜柳田の目に触れた一冊の古文書『狩之巻』こそ、日本民俗学の出発点『後狩詞記』の種本になったのである。

7 月 16 日、大河内で手応えのある収穫を得た柳田は、不土野の那須源蔵宅（旧　向山庄屋跡）に泊まる。

7 月 17 日、再び桑弓野の黒木宅に止宿 、

7 月 18 日、中の瀬では若い実業家那須鶴千代家に止泊。

7 月 19 日、胡桃坂を越えて馬見原 (熊本県蘇陽町) の旧家八田宅の客となり、一週間の椎葉の旅は終る。

15 日に大河内椎葉徳蔵宅で『狩之巻』を見た柳田は、猪狩りに心を寄せる。帰京した柳田は数度にわたり手紙を送り、中瀬はこれに応え「写し」を送る。農政学者と山村の村長との心からなる交流であった。

椎葉村を訪れた翌年、柳田は『後狩詞記』50 部を自費出版、本書は「土地の名目」「狩ことば」「狩の作法」「いろいろの口伝」と付録の「狩之巻」から成る。

当時の姿を留める松岡家。幕府より椎葉支配を預かった相良藩は椎葉を松尾、大河内、下福良、不土野の 4 組（掛かり）に分けた。松岡家は松尾の掛庄屋として代々受け継ぎ、交易を通じて神門との関係が深く、名声は富高まで届く。庭の大銀杏の色を見れば農耕の時期がわかると言われていた。住戸や外構は保存が望まれる。

■吉川英治と椎葉

「新平家物語」「宮本武蔵」などの著者として有名な吉川英治も椎葉とは縁が深い。 7 年間にわたる「新平家物語」の執筆中にあちこちに取材旅行に出かけてい る。昭和 25 年の暮れに持ち帰った、「ひえつき節」のレコードを何回もかけては、自分でも歌っていたという。吉川英治自筆でひえつき節の一節を書いた石碑が鶴富屋敷の敷地内にある。また、上椎葉ダムを「日向椎葉湖」と名付けたのも吉川英治である。

■椎葉根元記

1185(寿永 4)年、壇ノ浦の戦いに敗れた平家の残党は、諸方に離散した。今も平家落人の地と言い伝えられるところが、九州、四国を始め全国に 100 ヶ所を越えると言われている。九州山地のもっとも奥深い椎葉、五ヶ荘は地理的にも格好の隠れ里とみられ、代表的な落人の里として今に言い伝 えられている。

椎葉の歴史を記録した「椎葉山根元記」と「椎葉山由来記」は、村内に伝存した貴重な文献である。その内容から、どちらも江戸中期に編纂されたもので、大部分は、人吉相良氏の支配下に入った 1656(明暦 2)年直後に書かれたものであろう。平家落人伝承にはじまり、嶺野原合戦、鷹巣山指定、向山十三人衆の乱とその鎮定のための上使派遣及び鎮圧、その後の幕府領編入が記述されている。山役人を中核とする相良氏の椎葉山支配機構は、椎葉山戊辰年（1748）上納分までで終わり、全体構成は根元記も由来記も骨格は全く共通している。

■デ・レーケ、日本での業績

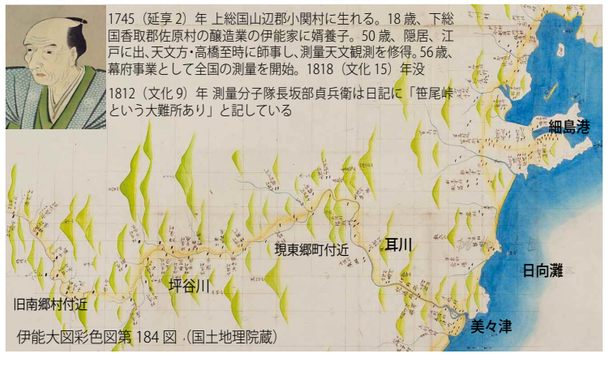
1873 (明 6) 年、内務省土木局に招かれ、G.A. エッセル (エッセルは 大学でもエリート) らと共に来日。(エッセルは 1 等工師）デ・レーケは 4 等工師として月給 300 円 (警察官の初任給 4 円、大阪府小学校長が 22 ～ 35 円) に遇せられ、1903 (明 36) 年の離日までの 30 年間、数々の業績を上げている。淀川の改修」、「木曽川の分流」、「大阪港、三国港、三池港等の築港計画」など枚挙にいとまがない。これらの業績に共通する方法は、

1. 上流域で砂防する (植林、砂防ダム等)。 2. 洪水は上流から河口まで分流させないで流す。 3. 洪水を流す河道は深く川幅を狭くして曲がりを少なくする。4. 蛇行した低水をつくり舟運の便を図る。5. 河口に導流堤をつくり土砂を海深いところへ流す。 であり、現代に受け継がれている。 1891 年～ 95 年の常願寺川治水工事では内務省への上申書に日本の川 を「これは川ではない、滝だ」といった言葉は有名。河川関係者に代々 言い伝えられている。 「・・・70 有余の河川みなきわめて暴流にして、山を出て海に入る間、長きは 67 里、短きは 23 里にすぎぬ。川といわんよりは寧ろ瀑と称する を充当すべし・・・」

■幕末の本草学者 賀来飛霞（かくひか）

当時の日本三大本草学者の一人。全国を歩き多くの標本や図譜を残した。江戸期には標本を保存するという概念がなかったため、日本の本草学を大成させ、近代植物学の基礎を築いた人物と評価されている。「賀来飛霞標本」は、宮崎県総合博物館に多数保管されている。2 度にわたり日向に訪れ、貴重な記録を残している。最初は 1841(天保 12) 年、高千穂、延岡、宮崎、飫肥などを回り、 2 度目は 1845(弘化 2) 年、薬草の事業化を考える延岡藩の招きで、現在の延岡、日之影、門川、諸塚、美郷、日向と藩内一円を調査。この時、植物だけでなく土地の習俗、行事、食べ物など生活全般を記した**「高千穂採薬記」**は当時の暮らしを知る貴重な資料となっている。

1816(文化 16) 年、現在の大分県豊後高田市生にまれる。1843(天 保 14) 年、 京都の山本亡洋から本草学を 学ぶ。1845(弘化 2) 年、『高千穂採薬記』を著す。1847(弘化 4) 年島原藩の侍医となり、1850(嘉永 3) 年の飢饉に会って、『救荒本草略説』 を著す。1878(明治 11) 年 ~1886(明治 19) 年には伊藤圭介の招きで東京大学小石川植物園に勤務。明治 15 年の東京植物学会（後の日本植物学会）の創設に参画。植物分類学の祖、若き牧野富太郎とは 2 年間、同職となる。1894(明治 27) 年没



伊能大図彩色図第 184 図 .(国土地理院蔵)

■伊能忠敬と耳川

1800(寛政 12)年から 1816(文化 13)年まで、全国を測量し大日本沿海輿地全図を完成させ、日本史上はじめて国土の正確な姿を明らかにした。1809(文化 6) 年、第 7 次測量で九州東海岸を踏破し耳川に足跡を残している。214 枚の 36000 分の 1 図をつくり、この図は第 184 図延岡・日向の一部である。日向内陸部地図では高千穂、馬見原まで測量している。

■若山牧水と美々津

耳川の流れが生んだ歌人、若山牧水の美々津に寄せる思いは、約百首にのぼる美々津に関する歌や、いくつもの随想に見ることができる。耳川支流・坪谷川が流れる日向市東郷町に生まれた牧水は、7 歳の時に母とともに高瀬舟で耳川を下り、美々津で初めて海を見る。その時の驚きを、随想「耳川と美々津」で、次のように記している。

「私は六歳か七歳の時、母に連れられて耳川を下ったことがある。そして舟がまさに美々津に着こうとする時、眼の前の砂丘を越えて雪のような飛沫を散らしながら青々とうねり上がる浪を見て、母の袖にしっかりと捉まりながら驚き懼れて、何ものなるかを問うた。母は笑いながら、あれは浪だと教えた。舟が岸に着くや、母はわざわざ私を砂丘の方に導いて更に驚くべき海、大洋を教えてくれた。…」

処女歌集「海の声」の中には、その原体験が映し出されたような歌がある。

あたたかき冬の朝かなうす板のほそ長き舟に耳川くだる

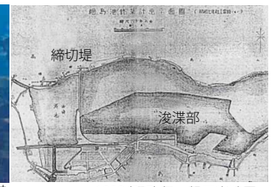
流域に住む人たちにとって高瀬舟で耳川を下り、美々津で海を見ることの驚きや、美々津の町、さらに外の世界へつながる大洋への憧れは、牧水と同様のものであっただろう。歌集「みなかみ」には、「日向国美々津港附近にて」という題で八十首以上の歌が収められ、その中の一首が権現崎にある歌碑に刻まれている。

海よかげれ水平線の黝みより雲よ出で来て海わたれかし

■デ・レーケと細島港

1891 (明24) 年7月、折生迫、大淀川口、細島を視察。細島港湾では、小河川からの土砂の流出に対し締切堤で防ぎ、港湾石垣の設置と浚渫を提言した。この提言によって 1894~5 (明27~8) 年に 2 万円余で工事に着工した。その後も浚渫と埋め立ての大改修が継続され天然の「呂」形を維持し今日に至っている。下図は 1932 (昭7) 年起工当時のものであり、締切堤はデ・レーケの提言で石垣で構築されていた。この堤の西側が完全に締め切られ、自然に淡水化して沼地になっていた。この図に描かれている締切堤と桟橋地区の陸地化は 1935 (昭10) 年に変更され、堤の南 2/5 を除去して 2 万㎡の浚渫を行い湾奥への船舶の停泊を可能にした。この石垣堤は昭和 50 年代まで原形を保っていたが石垣の隙間が徐々に広がり、その後、コンクリートで覆う工事がなされた。

現細島港



1932 (昭7) 年　起工当時図

■増田淳の設計思想

増田が設計した橋梁は、東京府で 12 橋 , 埼玉・長野・岡山で 6 橋 , 兵庫・徳島・熊本で 5 橋というように , 特定の府県に集中している。例えば、宮城や徳島では増田の実績や技術力の 信頼により複数の橋梁設計を一括で受注し、埼玉や長野では一つの橋で信頼を得て継続的に受注している。年度別に見ると , 1928 (昭3)年の 11 橋を ピークに 1924 (大13)年から 1933 (昭 8)年の 10 年間は、年間 5 橋以上の設計を行っている。

増田は東京や東京周辺の橋梁よりも、大自然に囲まれた地方の橋梁の設計が多い。橋梁に対する思いは橋梁の説明文から読み取ると橋梁本体の姿・形 , 周辺環境との調和、付属品への配慮・効果などの中に込められている。美々津橋では以下のように語っている。

「翠山、明水、白帆乱れ動く美々津港の正面に、蜃気楼のごとく浮かび上がる本橋の美容貿翫（美しさに見とれること）に値せん」

1) スパン割では連続性や対称性を考慮
2) 形式選定 では、経済性や周辺環境との調和を重視
3) 曲線や直線構造を使い分け橋の美を創造
4) 上対傾構や橋門構の装飾で美観効果を向上
5) 時にはオリジナルな構造を提案
6) 高欄や照明灯などの付属物に配慮

美々津橋親柱：頂部照明にも細かい配慮が見られる

この地図の作成に当たっては国土地理院長の承認を得て、同院発行の 20 万分の 1 地勢図（NI-52-6）を使用した（承認番号 平 23 情使、第 24 号）。